

主 題：霊的リーダーのあるべき姿：執事とその資格①

聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章8節

テーマ：聖書の教えている霊的リーダーとはどのような存在か

今朝、皆さんと続けて学んでいきたいのはIテモテ3章のみことばです。ここ数カ月にはわたって、私たちはパウロの記したこの手紙から、教会の霊的リーダー、特に監督について1-7節を通して考えてきました。そして、それが先週で終わり、きょうからはその続きとなる8節から執事についてともに見ていきたいと思えます。きょう実際に見るのは8節の一つのことばだけです。ただ、8-13節のところを見れば、執事についてパウロが触れていることを見て取ることができます。ですから、文脈を覚える上でもぜひ8-10節を自分自身でも読んでみてください。そこから私たちは執事について考えていきます。

その内容を見ていく前に、まず一つの質問があります。皆さんはこれまでにレストランに行ってひどい経験をしたことであるでしょうか？もっと言えば、店員の接客が原因でひどい体験をしたことはないでしょうか？自分自身はそんなことが何度かありました。えっと思うような雑な扱いでメニューを下げられたり、機嫌が悪く、怒っているのかなと思えるような気まずい雰囲気の中で対応されて、せっかくの楽しい時間が台なしになってしまった、そんな経験を皆さんも一度はしたことがあるのではないかと思います。また自分のことだけでなく、そのような場面に直面している人を目撃したこともあるかもしれません。たとえその店全体の雰囲気がすばらしくて、出てくる食事もとてもおいしかったとしても、そのレストランで働く人の対応によって、そのすべてが一変してしまうことがあります。要するに、店で働いている人というのは、その店の印象に非常に大きな影響を与えることがあるのです。最初にも言いましたが、きょうから私たちが見ていくのは、そんな仕える人、執事についてです。そして同じように、教会で仕える執事がどのような態度やふるまいをするのかは教会内にも、教会外にもさまざまな影響をもたらします。たとえ霊的リーダーである長老がみことばを忠実に語って、教会の中でいろいろな奉仕がなされていたとしても、その働きに仕える者たちが神様に喜ばれない歩みをしていけば、それは教会全体のあかちに深刻なダメージを与えることとなります。だからこそ、主の望まれる教会として、私たちが成長し続けていくためには、前回見た霊的なリーダーである監督についてだけでなく、執事についても正しく知り、正しく理解している必要があります。

○霊的リーダー：執事について

では、執事とはそもそもどのような存在なのでしょう？どんな働きをして、どんな霊的な特徴を持っていること、満たしていることがみことばに求められているのでしょうか？そのことをきょうから数回にわたって考えてみましょう。ただ、パウロは、この執事について先ほど言った8-13節のところを通して説明してくれているので、まずはその部分を皆さんと一緒に読んでみたいと思えます。

まず、8節から見てください。パウロは執事についてこのように記していました。

Iテモテ3：8-13

「：8 執事もまたこういう人でなければなりません。謹厳で、二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利をむさぼらず、：9 きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人です。：10 まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事の職につかせなさい。：11 婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。：12 執事は、ひとりの妻の夫であって、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。：13 というのは、執事の務めをりっぱに果たした人は、

良い地歩を占め、また、キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信を持つことができるからです。」

●字義的定義

さて、執事とはそもそもどのような存在なのかということを考えていくに当たって、きょうはまずそのことばの意味から考えてみたいと思います。

この「執事」と訳されていることばには、もともと「しもべ」や「仕える人」といった意味を持った“ディアコノス”というギリシャ語が用いられています。例えば、このことばはあのカナの婚礼の場で給仕をしていた者を呼ぶイエスの母親のことばの中に用いられていました。そのことがヨハネ2：5、9にこのように記されています。「：5 母は手伝いの人たちに言った。「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」……：9 宴会の世話役はぶどう酒になったその水を味わってみた。それがどこから来たのか、知らなかったの、——しかし、水をくんだ手伝いの者たちは知っていた」、ここで二度にわたって出てきました。「手伝いの人たち」、「手伝いの者たち」ということばが同じ“ディアコノス”ということばです。

また、この“ディアコノス”というこのことばの動詞形であれば、病気を癒されたペテロのしゅうとめがイエス様を食事などでもてなす様子を表すのにも用いられていました。そのことがマタイ8：14－15に「：14 それから、イエスは、ペテロの家に来られて、ペテロのしゅうとめが熱病で床に着いているのをご覧になった。：15 イエスが手にさわられると、熱がひき、彼女は起きてイエスをもてなした。」と記されています。最後に出てきた「もてなした」ということばが同じことばの動詞形が用いられています。また、皆さんもよくご存じの話の一つだと思いますけれども、あのマルタとマリヤの話の中でも、このことばは用いられていました。ルカ10：38－40のところに「：38 さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村に入られると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。：39 彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。：40 ところが、マルタは、いろいろともてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」と記されています。姉のマルタはイエス様が家に来られたことを喜んで、いろいろなことをしてもてなそうとしました。一生懸命に食事の準備などをしていたのです。しかし、次第にそのことに心が奪われて、そして自分の妹が何もせずに、ただイエス様の話聞いて座っているのを見て、腹を立てるようになってしまいました。マルタは本当に大切なことを、何かをもてなすことによって見失っていたのです。だからイエス様は彼女に続けてこう言っていました。ルカ10：41に「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。：42 しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。」と。

いずれにせよ、こうして“ディアコノス”や“ディアコネオ”（動詞形）ということばが新約聖書の中でどのように用いられているのかを考えてみれば、このことばは一般的に「食事を用意する」といった幅広い雑用的な仕事を表すものとして用いられていると見て取ることができます。言いかえれば、人々の抱えるさまざまな物質的な必要を満たすために世話をしたり、仕えることをこのことばは意味しているのです。そして、教会にあって、公の職として、人に仕えるという働きを行う霊的リーダー、それこそが執事と呼ばれる人物でした。パウロはピリピ人への手紙の書き出しのところでも、同じ教会の職である監督と並べて執事についてこんなふうに触れていました。ピリピ1：1のところに「キリスト・イエスのしもべであるパウロとテモテから、ピリピにいるキリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、また監督と執事たちへ。」と。ですから簡潔に言うならば、執事というのは教会にあって正式な肩書きを与えられた、人々の抱えるさまざまな物質的な必要を満たそうと仕える人のことを言うのです。困っている人や必要を覚えている人を助けようとする、そんな重要な役割を与えられたのがこの執事と言われる存在でした。

●執事の働き：重要な四つの要素

でもこれを聞いて、ある人は思うかもしれません。執事という存在が人々の必要を満たそうとする人物であることはよくわかりました。もう少し具体的に、彼らはどんな形で教会に仕え、一体何をされるのですかと。もしそのような疑問を抱いた方がいるのであれば、安心してください。皆さんだけがそうであるわけではありません。実際、多くの人々が、教会にあって執事が何をするのか、そのことをよくわかっていなかったりします。そして、これはある意味、当然なことなのかもしれません。なぜなら、執事について私たちがみことばを見る時に、みことばを見ても執事に関して明白なことは記されていないのです。みことばは、執事はこのような働きをなさいと、具体的に列挙してくれてはいません。だからこそ、執事の働きに対していろいろな意見や考え方が挙げられているのです。ですから、これから執事とは一体何をされる存在なのかを考えていくのですが、これが唯一の答えですと言うことはできません。しかし、私たちがみことばを見ていく時に、執事の働きを理解していく上で、大切な四つの要素を見て取ることができます。そのことを少し時間をかけて、皆さんと学んでみたいと思います。

その前に大切なことなので、皆さんよく覚えておいてください。それは、たとえ皆さんがこの先、正式に執事としての肩書きを持って仕えていかなかったとしても、みことばはすべてのクリスチャンが仕える者として歩んでいくことを求めているということです。オフィシャルな肩書きを持っていたとしても持っていなかったとしても、私たちはみな仕える者として歩んでいくことを聖書は求めていました。ペテロも I ペテロの中でこのように教えていました。I ペテロ 4 : 10 に「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」とありました。ペテロはただ監督や執事といった、そういった霊的なリーダーにだけ向けて、賜物を用いて仕え合っていきなさいと言っていたのではなかったのです。彼はすべての兄弟姉妹たちに向かって、あなたたちに与えられた賜物を用いて、互いに奉仕していきなさい、互いに仕え合っていきなさいと求めていました。ですから奉仕するということと、仕えるということは教会のリーダーだけではなくて、すべての信仰者に求められているということです。仕えるということは、私たちが神様から与えられた大切な責任になります。

そして、これから私たちが考えていく、この仕える者——執事の姿を、考えていけば考えていくほど、私たちが前回見た監督の姿でも言われたように、仕える者がどのようなことをするのかということが見えてきます。私たちが仕える者として、どのような姿を目指していくべきなのか、そのことを私たちは、このみことばを通して見ることができます。みことばが教えているその姿に照らし合わせながら、ぜひ自分自身の歩みをよく吟味してみてください。

では執事とは何なのか、具体的にどんな働きをするのか、重要となる四つの要素をみことばから見てみましょう。

1. 執事は長老の働きを助けるために仕える者

まず一つ目に、執事の働きに関して言えることは、執事は長老の働きを助けるために仕える者だということです。使徒 6 : 1 - 6 に「:1 そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである。:2 そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。:3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。:4 そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」:5 この提案は全員の承認するところとなり、彼らは、信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、アンテオケの改宗者ニコラオを選び、:6 この人たちを使徒たちの前に立たせた。そこで使徒たちは祈って、手を彼らの上に置いた。」と記されていました。今読んだことに関して、ある人たちはここで

選ばれていた7人の人物たちが最初の執事であったと考えていたりします。実際に教会の歴史を振り返っていても、多くの人たちが執事職の起源について、この箇所がそれを語っている、そう扱ってきました。しかし、私自身はそうのように言い切ることはできないと考えています。なぜかという、いろいろな理由を挙げることができますけれども、一つ言えることは、この箇所を含めて新約聖書を見る時に、この選ばれた7人に対して一度もみことばははっきりと「執事」ということばを使っていないということです。また、それに加えて、ここで選ばれていた人物たち、特にステパノやピリポという人物の歩みを考えてみれば、彼らは食卓に仕えるといった執事の働きよりも、より長老に近い働きを行っていました。そのことはみことばが私たちに教えてくれます。例えば、ステパノのことについては、続く7章や8章に詳しく書いてありますけれども、ステパノは大祭司たちの前で大胆にみことばを語っていたのです。同じようにピリポに関して、使徒はいろいろなところで記してありますけれども、ピリポもサマリヤなど町々をめぐって、キリストの福音を宣べ伝えていた様子が記されています。そして、伝道に熱心だったピリポは、後に「伝道者」と呼ばれていました。これらのことを踏まえて考える時に、この箇所で選ばれていたこの7人の人物の姿をそのまま今の教会の執事の働きに当てはめるとすることは少しできないのです。

では、今読んだこの使徒6章から私たちが何を学べるのかというと、仕える者たちの姿、執事のひな形というものを考えることができます。もっと言えば、この箇所を通して、執事の働きを理解する上で、非常に重要な要素を見て取ることができるのです。先ほども言いましたけれども、執事は教会のリーダーである長老の働きを助ける、そのような働きをする存在だったということです。まだよくわからないという方、もう一度みことばを見てください。教会のリーダーたちが持っていたその責任が、この6章の中に記されています。2節と4節を見てください。「:2 そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。……:4 そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」」と書いています。リーダーに与えられていた大切な責任は、神様のことばと祈りに忠実であることでした。ここで皆さんに勘違いしてほしいくないことは、使徒たちは何も食卓に仕えることをないがしろにしていたのではないということです。彼らは別に自分たちが人々に仕えるということをしませんよ、そんな仕えるなどという働きには私はつきませんよと言っていたのではないということです。みことばを見た時にわかりますけれども、神様のことばも、祈りも、また人に仕えるということもどれを取ってもすごく大切なものなのです。ここでのポイントは、教会を導いていく者、今で言うのであれば教会の長老にとって、すべてのことにおいて一番優先すべきことは、みことばの奉仕と祈りだということです。ここでは最優先すべきことを一番に扱いなさい、それをほかの物に置きかえたり、ないがしろにすることがないようにと教えられていました。

少し想像してみてください。教会というのは、確かにすばらしい働きをたくさんすることができます。例えば、私たちはいろいろな方法を用いて伝道することもできますし、貧しい人や困っている人たちを助けることもできます。でも、いろいろな責任に追われて、みことばを教える準備や祈る時間がリーダーからなくなっていけば、教会のリーダーである長老は、自分に与えられているその責任を果たすことができなくなるのです。以前、私たちが教会のあるべき姿のことを考えた時に、パウロは教会に牧師または教師が与えられたその理由を、エペソ4：11-12でこのように述べていました。「:11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。4:12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、」と。この箇所を学んだ時にも言いましたけれども、教会に霊的リーダーとして牧師が与えられているのは、何もその人物が教会でなされるすべてのことをするというものではありませんでした。そうではなくて、むしろ牧師であり、教師であるその人物がみことばを忠実に語ることによって、聖徒た

ちを整えて、そしてみことばによって整えられた者たちがキリストのからだを建て上げるということ、それが教会に教師が、牧師が与えられていた目的だったのです。それにもかかわらず、もし長老がほかの働きに手いっぱいになって、祈ることもみことばを学ぶことも十分できなくなっていけば、みことばをもって人々を導いたり、養ったりすることができなくなっていくのです。そして次第にその教会は土台が揺らいでしまって、いろいろな誘惑や罪によって弱っていくのです。

ここで問われていたことは、何が教会にとって、霊的リーダーである長老にとって最も優先されるべきなのかということでした。そしてそれはみことばと祈りに励むことでした。それがこの長老——教会の霊的リーダーに与えられた最大の責任だったのです。だからこそ、ここで執事が登場するのです。執事はこの優先されるべきことを守るために、もっと言えば、長老たちがいろいろなものに邪魔されて、みことばと祈りに専心することができなくならないように、その働きを助けようとするのです。これは別に監督と執事のどちらかが優れていて、どちらかが劣っているという話ではありません。それぞれに教会においての重要な役割があって、その働きを全うすることが求められているということです。もちろん監督は実際にいろいろな働きに加わって、いろいろな形で奉仕もします。しかし、何よりも群れのひとりひとりの霊的なケアをするために、みことばを学んで祈るということを優先しなければいけないのです。片や執事ももちろんいろいろな形で仕えることができます。でも、何よりも群れのひとりひとりの物質的なケアや体のケアをしようと働くのです。

皆さん、少し考えてみてください。監督が霊的なケアをしようとみことばを学んで、執事たちが物質的なケアをしようと働くのであれば、この二つがしっかりと働けばどうなると思います？そうすれば、教会のひとりひとは、霊的な面においても、物質的な面においても、そのどちらにおいても霊的リーダーたちによって養われていくことができるのです。だから優先されるべきことを守ることは非常に大切なことであり、執事というのはまず長老がなすべきその責任を、その働きを助けるために仕えていく存在だということです。教会において優先されるべきことを判断し、それを守ることがこの執事の大切な役目になるのです。

2. 執事は教会の一致を守るために仕える者

次に、二つ目に執事の働きに関して言えることは、執事は教会の一致を守るために仕える者だということです。この二つ目の要素に関しても、同じく使徒6：1から見て取ることができます。そこには「1 そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシャ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに對して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである。」と記されていました。この時、教会には大きな問題が起こっていました。非常に危険な状態にあったのです。それは非常に急激に多くの兄弟姉妹たちが教会に加えられていく中であって、ギリシャ語を使うユダヤ人とヘブル語を使うユダヤ人との間にえこひいきの問題が生じていたということでした。毎日の配給において、ギリシャ語を使うユダヤ人のやもめがないがしろにされて、その必要が満たされていなかったのです。そのような問題が起こっていました。

でも、ここでまず皆さんに注目してほしいのは、人々の苦情や不平不満というものがどれほど教会の一致に影響を及ぼすかということです。「苦情を申し立てた」と書いていました。もしかしたらある人は思うかもしれませんが、不満を口にしたり、文句を言うことはただのことばなのだから、自分にとどめていればそんな大きな問題にならないのではないかと。しかし、残念ながらみことばはそのようには教えていないということです。いや、むしろ不平や不満というものは、神の家族の間に争いをもたらしたり、不一致というものを生み出してしまう危険なものだと考えることができます。例えば思い返してみてください。かつて多くのイスラエル人たちが神様のさばきを受けて、荒野で滅ぼされることになりました。その原因はいろいろなことがありました。でも、パウロは、このようにIコリント10：10で言うのです。「また、彼らの中のある人たちがつぶやいたのにならってつぶやいてはいけません。彼らは滅ぼす

者に滅ぼされました。」と。偶像の罪や姦淫の罪、確かにいろいろありました。でも、滅ぼされた原因の一つは、神様に対してつぶやいたことでした。彼らは何度も何度も神様に対して、不満を口にしましたのです。いろいろなものがありました。例えば飲み水がありません、どうして私たちをエジプトの地から連れ出したのですか、渇きで死なせるためなのですかと言ったこともありますし、ああ、肉が食べたい、どうして私たちをエジプトの地から連れ出したのですか、エジプトの地で肉やパンを満ち足りるまで食べて、主の手にかかって自分は死んでいたらよかったのにと。彼らは主の偉大な力を何度も何度も目撃し、主の恵みやあわれみというものも何度も何度も味わっていました。しかし、それでもなお、彼らはそれらを忘れてつぶやいていたのです。だからこそ、神様はそんな者たちを厳しくさばかれていました。大切なことは、神様はそのような不平不満というものを決してよしとはされないということです。

でも、私たちはこうしてイスラエルの人たちの話を聞く時に、彼らはなんて愚かなんでしょ、神様のすばらしい御力や深いあわれみ、そういったものを繰り返し目の当たりにしながら、どうして同じことを繰り返すのだろう、私だったら不平不満を口にするなんて考えられない、こんなふうには思ったりしません？ そんな私たち自身の歩みはどうでしょう？ イスラエルの民と何ら変わらない歩みを私たちはしていないのでしょうか？ 神様の存在や、この方のことばや約束というもの、そのことを忘れてすぐに心が不満に満ちあふれたりしないのでしょうか？ 私たちは、神様が偉大な主権者であり、すべてのことを支配されているお方だとみことばを通して教えられ、そのことを信じています。でも自分の予想していなかったことが突然起こったり、望まない状況に置かれた時、すべてのことを神様が支配されていると知っていますけれども、自分の思い描いていた計画がどれもうまく行かずに、やることなすことがすべて失敗するような時ならどうでしょう？ また、私たちは神様が私たちの必要をご存じで、それを備えてくださり、いつもともに歩んでくださる、そんなあわれみ深いお方だとみことばを通して教えられ、そのことを信じています。でも望んでいる物が与えられなかったら？ それだけではなくて、代わりに周りの人がずっと自分が望んでいた物を手にしていることを目にしたら、私たちはどうでしょう？ いろいろな試練が降りかかってきたり、信仰ゆえに迫害を受けたり、そのような中であって先が真っ暗で何も見えないように感じてひとり取り残されたように思える時にはどうでしょう？ 果たしてそのような場面に置かれても、私たちは変わらずに神様を覚えて感謝を見出すことができるのでしょうか？ それとも不平不満を抱いて、神様に対してつぶやくのでしょうか？

不満を覚えている私たちの問題は、イスラエルの民がそうであったように、神様を忘れているということです。私たちが不平不満を言う時、私たちが神様を忘れているのです。それは周りの状況かも、人かもしれません。いろいろなものに私たちの心が奪われて、神様を忘れてしまうのです。私たちが見るべき神様を忘れてしまえば、満足や平安を失うだけではなく、神様に従って喜ばれることもできなくなってしまいます。神様を忘れていれば当然、人々の間にも争いや問題が生じるのです。だからこそ、みことばは私たちがいつも神様を忘れることがないようにと教えていました。申命記8：11に「**気をつけなさい。私が、きょう、あなたに命じる主の命令と、主の定めと、主のおきてとを守らず、あなたの神、**

【主】を忘れることがないように。」と記されています。ですから、神様を忘れ、不平不満を口にすることは自分自身だけでなく、いろいろなものに問題をもたらすのです。教会にも大きな影響をもたらします。不平や不満は、分裂や不一致というものをもちこたえてしまう危険なものであるからこそ、神様もそれを忌み嫌っていました。だからこそ、教会にとって大切な一致を保っていくために、使徒6章に書かれていたように、その問題を解決することが求められていたのです。霊的リーダーであった使徒たちがこの問題を解決するためにしたことは、その問題と向き合って足りていない人々の必要を満たす、仕える人を選ぶことでした。教会に起こっていた問題を解決するために、執事は教会の仕える者として選ばれたのです。執事は教会の一致を守っていくという大切な役目も与えられていました。

3. 執事は人々の必要を満たすために仕える者

三つ目に、執事の働きに関して言えることは、執事は人々の必要を満たすために仕える者だということです。この点に関しては、これまでもう何度か見てきたので簡潔に触れますけれども、執事というものは人々のさまざまな物質的な必要を満たす責任を負っていました。例えば、これまで見てきた使徒6章でも、その責任を明確に見て取ることができます。使徒が働きのすべてをする代わりに選ばれた者たちの役割は、食卓に仕えてやもめの抱えている必要を満たしてあげることでした。教会の中において助けを必要としている人たち、弱い者たちや病気の者たち、そういった者たちが覚えている物質的な必要を備えてあげることが執事の一つの大きな責任だったのです。

ここで皆さんに覚えていてほしい大切なポイントがあります。それは執事というのは、それぞれの地域教会にあって、その教会の抱えている必要に応じて仕える存在だということです。最初にも皆さんに言いました。みことばは執事に対して具体的にこのような物質的な必要を満たして、このような働きをしていきなさいということ細かくは明記していません。でもそれは逆を言うと、それぞれの教会の群れの必要に応じて、霊的リーダーたちが判断して養っていくことが必要だということです。教会にはいろいろなサイズもありますし、いろいろな違いがあるのです。教会の人数が少なければ、その少ない人数の中での必要というものを満たす必要が出てきます。教会の人数がふえていけばふえていくほど、さらなるニーズがふえていきます。教会の年齢層が違ってても違いを生みます。教会の年齢層が上がれば、また別の必要が出てくるのです。だからこそ教会の長老と執事というものは協力して働いて、長老は特に群れの霊的な面を、また執事は特に身体的なもの、物質的な面を満たそうと仕えていくのです。教会によってさまざまなニーズ、さまざまな必要の違いはあります。その教会に必要なものを長老と執事はともに働いて満たそうとするのです。そして特に執事は身体的な、物質的な必要を満たすということ、それが大きな責任でした。

4. 執事は人々の前で模範を示して仕える者

そして最後四つ目に、執事の働きに関して言えることは、執事は人々の前で模範を示して仕える者だということです。もっと言えば、執事は主のように仕え、その姿勢をもって人々の前でキリストのあかしを立てる人物だということです。どういうことなのかを理解する上で、マルコ10章を開いてみてください。皆さんもよく知っている話の一つだと思いますけれども、イエス様と弟子たちの会話をよく思い返しながらかここを見てください。32節から見ていくと、イエス様が弟子たちに対して、これからあざけられ、むち打たれ、十字架で殺されるということ、しかし、その3日後に墓からよみがえるということを語られた後に、ヤコブとヨハネがイエス様のもとにやって来て、あるお願いをするのです。そのことが35-37節に「:35 さて、ゼベダイのふたりの子、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。「先生。私たちの頼み事をかなえていただきたいと思います。」:36 イエスは彼らに言われた。「何をしてほしいのですか。」:37 彼らは言った。「あなたの栄光の座で、ひとりを先生の右に、ひとりを左にすわらせてください。」と記されていました。非常に大胆なお願いですよ。二人が願ったことは、自分自身が栄光を受け、栄誉を受け、ほかの者たちよりも高い位置につくことでした。そんなことを願ったのです。そしてそんな願いを二人がしたことを耳にした、ほかの10人の弟子たちがとった行動が41節に出ています。「十人の者がこのことを聞くと、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた。」とあります。一体どうして彼らは腹を立てたのでしょうか？それは、弟子たちの間では誰が一番偉いのかということ常々争っていたからでした。彼らは誰よりも自分が上に立ちたい、ほかの弟子たちよりもさらにすぐれた一番の扱いを受けたいと望んでいました。彼らの心は高慢な思いであふれていたのです。だから抜け駆けした二人のことを許せなかったのです。イエス様は、そのような現状をご覧になられた上で、42-43節で「:42 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。」:43 しかし、あなたがた

の間では、そうでありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。」と言います。

弟子たちに伝えたかったポイントは明白でした。イエス様はまず言うのです。あなた方も知ってのとおり、神様を知らない異邦人の支配者たちは人の上に立って権力を振るうことを何よりも願って、それを喜びとしています。そういった者たちは、自分の立場や肩書きを用いて人々を支配することを望んでいるのです。これが実際に何を意味しているのか、皆さんもよくわかると思います。私たちがこの世の中を見渡してみれば、まさにこのような考えを持った人たちはたくさんいるのです。自分が一番になるためであれば、自分以外の周りの者たちがどうなろうと知らないと関心を払わない者。また、一度権力や何かの肩書きを手に入れば、それを武器にして人々が自分に従うことを強いるような者たち。誰かに仕えることよりも仕えられることで心がいっぱいになっている人物の歩みというのは、まだ神様を知らない者の典型的な歩みです。だからこそイエス様は続けてこう言うのです。「しかし、あなたがたの間では、そうでありません」、神様を知らない支配者たちはそうやってふるまっているかもしれません。でも、あなた方は決してそうであってははいけなと。なぜなら神様を知っているのであれば、自分が偉くなって人から仕えられることを望むのではなく、人々に仕える者になりなさい、みなに仕えるそのしもべとなりなさいと。イエス様が求めたことは、プライドにあふれた弟子たちがへりくだって互いに仕え合うことでした。自分を捨てて、ほかの人に喜んで従うことが問われていたのです。

そして、考えれば、これこそまさに主ご自身が示された模範でもありました。だからこそイエス様は続きの45節で「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」と言われていました。人の子がこの地上に来られた目的、それは仕えるためでした。本来であれば、仕えられるべき偉大な力ある王である方にもかかわらず、この方は仕える者としてみずからをへりくだらせ、多くの人のための贖いの代価として十字架にかかってご自分のいのちを捧げられたのです。この方は私たちのような罪人に救いを与えるために、そのすべてを捧げてくださいました。いっさい主の救いに値しない愚かでどうしようもない罪人である私たちのために、主はご自分の身を捧げてくださいましたのです。そしてこのようなへりくだりを、このように主が仕えてくださったからこそ、今、私たちはこの方のうちにあって救いを得、この方のうちにあって永遠のいのちを与えられています。この世での生活が終われば、主とともに永遠を過ごすことができるのだという、その揺るがぬ希望とそのような約束が私たちには与えられているのです。主がそのようにしてへりくだってくださいましたからこそ、主がそのようにして仕える者として来てくださったからこそ、私たちは今このようにして歩むことができます。これが人の子が私たちに示してくださいました仕える者としての模範でした。だとすれば、問題は私たちがどのようにして神様と人々に仕えようとしているのかということです。

時に、仕えるということにはいろいろな犠牲が伴います。時間もそうだろうし、体力もそうです。また、自分自身さえもへりくだって捧げられることを求められます。だれも見ていないところで、だれにも評価されずに、感謝されないようなことも経験することでしょう。仕えることには多くの犠牲が伴うのです。でも、その時は覚えることです。私たちが仕えている時にこそ、主が残されたその足跡に従って歩んでいるのだと。主は仕える者としてこの地上に来られました。その模範を残されたのです。私たちはその模範に従って歩いていくことです。主は私たちのためにすべてのもの、ご自分のいのちまでも犠牲にしてくださいました。だとすれば、私たちはその犠牲に対してどんな犠牲を払って仕えようとしているのでしょうか？どんな心の態度で主のしもべとして日々を歩んでいるのでしょうか？イエス様、あなたが私のために犠牲になってくださったことはわかっています。それがどれほど素晴らしいことかはわかっています。でも私はあなたのために犠牲なんて払いたくありません、そのような歩みを私たちはしていないかということです。神様は、すべてのクリスチャンが神様に対して、また互いの間で仕え合っている

くということを求めていました。私たちは仕えていく者として歩む責任が与えられていたのです。執事はキリストにならって歩いて、人々の前でその仕える者としての模範を示す存在だということです。そしてこれが四つ目の執事の働きに関する要素でした。

〇まとめ

さて、きょう私たちは教会の霊的リーダーである執事について学び始めました。どうだったでしょう？執事というものは、教会の長老の働きを助ける者でした。執事というのは教会の一致を守るために仕える者でした。執事というのは人々の物質的な必要を満たすために仕える人でした。執事というのはキリストにならってみずからをへりくだらせ、人々の前で模範を示していくために仕えていく人物でした。非常に重要な責任が、非常に重要な働きが執事には与えられていたのです。教会にとって、非常に大切な働きを担っている存在でした。来週以降、執事がどのような霊的特徴を持っているのかということ、執事の資格を中心に考えていきます。ですから、ぜひ皆さんもこの執事と呼ばれる存在がどのような存在なのかをみことばを読んでともに考えていきましょう。

しかし同時に、きょうも私たちがみことばを通して見たように、仕えるというその責任、その働きは私たちすべての信仰者に課された大きな任務でした。仕える者として、私たちは今生かされているのです。私たちにとってそのことをなしていく上で大切なことは、私たちの主の模範を覚え続けることです。私たちの主がどれほど大きな犠牲を私たちのために払ってくださったのか、主が私たちのその救いを達成するためにどのような苦しみを味わわれたのか、そのことに目を向けることです。そしてそのことに心をとめながら、私たちは今週も主と人ともに喜んで仕える者として、成長を目指して歩いていきましょう。